

---

# グリコピロレート公爵令嬢の受難

山田花子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グリコピロレート公爵令嬢の受難

### 【Nコード】

N9931V

### 【作者名】

山田花子

### 【あらすじ】

ユウリカ・ベラドンナ・ララ・グリコピロレート。愛称ララ。グリコピロレート公爵家第三子長女のララは前世の記憶を持ったため世渡りが上手く、公爵家という大貴族に生まれ地位も金もあり、更には美しい母から生まれ可憐な容姿を持つという、正に将来を約束された生まれた時から人生勝ち組で、自らもそう思っていた。さてこれからどんな贅沢三昧を送ってやるうかと企んでいたララだったが、5歳の誕生日の日、父親から非情なお願いをされる。「王女のお友達になつてくれないか？」そして始まるララの転落人生。イージー

モードだった世界は実はハードモードだった！？お転婆我が儘好奇心の塊！面倒事を巻き起こし、また、面倒事に首を突っ込まずにはいられない王女に振り回される毎日。私の勝ち組薔薇色人生はどこへいった！その辺に落ちてる人や己の従者、兄、はたまた忠義を尽くさなければいけないはずの王女すらも身代わりにして災厄から身を避けつつ、ララは今日も思う。「転生なんてするんじゃないかかった！！」負けるなララ。頑張れララ。挫けたらそこで人生終了だ！

## プロローグ

私は決してあの女を忘れないだろう。例えば崖の上から突き落としてやりたいだとかナイフで頸動脈をかつ切ってやりたいだとか毒を一服盛ってやりたいだとか重しをつけて湖に沈めてやりたいだとかかを思っていたとしても、そんなことをすればお家末梢の一路間違いないわけで、そんな事情すらも恨みの一節となっている。人間の記憶というのは理不尽な物で、楽しいことよりも恨みの方をよく覚えてる。そういうわけで、私がヤツを憎くて憎くて憎くて憎くてうがー！ となればなるほどヤツのことを記憶してしまうものなのだ。無駄である。この上ない無駄である。ヤツのために私の素晴らしい脳細胞を消費してやるなど！ ひっじょーに不本意だが、この人生、そういう局面の方が多かった。ひっじょーに不本意なのだが！

私の人生は彼女と共にあり、彼女に捧げることがまるで至極当たり前のことのように扱われ、またそうさざるを得なかった。ああなんて私は可哀想なのでしょう。あんな女のために！ 私のこの素晴らしい頭脳を！ 肉体を！ 美貌を！ 使わなければならなかったなんて！！

私は決してあの女を忘れない。あの女に味合わされた苦痛の日々を忘れない。あの女の無駄に長ったらしい名前も、私の素晴らしい記憶力を誇る脳みそが覚えてしまったから、きつと死ぬまで覚えているだろう。

ヤツの名前はユウリカ・ミリ・マイクロ・ナノ・ピコ・フェムト・アト・ジュゲム・ゴコウ・リキ・カイヤ・スイギ・ヨノ・スイラ・ウンラ・フウラ・クウネ・スムトコ・ヤブラコ・カブコ・パイポ・

シューリンガン・グーリン・ポンコ・ポンピ・ポンコ・ポンナポン  
ポ・チヨウキ・アルバ。アルバ魔法王国第一王女様だ。

## グリコピロレート公爵令嬢の黒歴史

私に自我が生まれたのは母の胎内に居た時。意識がある時は少なく、気付けば心地よい水の中に居たり、やたらと明るい空間に転がされていたり、灯が何一つない暗闇の中であつたりした。赤ん坊とこののはあまり意識がはつきりしないらしい。目も膜がかかったように見えないし、耳だつてよく聞こえない。まあ耳は、ただ日本語じゃなかったというだけなのだが。そんなわけで、私がつっかり意識を保ち、思考できるようになったのは3歳くらいの時だ。それまでは頭もぼんやりとしていた。初めて思ったことは、(あれ、こんなに机つて大きかったっけ?)だ。いやいやずつとこんな大きさだったじゃん?あれでももつと小さい机に見覚えあるし……あれ?つてな感じだった。私には前世の記憶が残っていたのだ! この世界とは色んな事が大幅に違う世界だった。常識とか、一般論とかがまず違かった。色んな記憶を思い出していつて、私は理解した。この人生、勝った! と。

思ったのではなく、理解したという表現を用いたことに注目してもらいたい。「理解」の意味を辞書で引いてほしい。『理解りかいとは、物事の理由、原因、意味を正しく知ることである。』 Wikipedia様ありがとう。分かった?正しく知ったのだ。この人生は勝ち組である、と。

鏡を覗きこめば美少女が見返している。前世では持ち得なかった完璧な美貌を、今生の私は持っている! 銀に近いきらきらと輝くように波打つ山鳩色の髪、小顔でぷるぷるつやつや、幼児らしく赤く色づいた頬、利発そうに輝く藍媚茶の透き通るような瞳、長くふっさふさで繊細な睫毛、ぷっくりとぴんくに色づく唇、今はまだちよこんと可愛らしく乗ってる鼻も、母を見る限り成長したらすつと通った鼻筋になることだろう。この世界は髪や瞳が色づいているも

のは魔族だけだから無彩色で少し味気ないが、どれものパーツが完璧に配置されていてどこからどう見ても美少女だ。この顔だったら一日中ずっと鏡の前に座っていたって飽きることはないだろう。だってこんなにも美しいのだから！

勿論使用人やお母様、お父様、お兄様も私の美しさにはメロメロで、私にベタ甘だった。笑いかければ、でれーっとした締まりのない笑みが返ってきて、やれ欲しいものはないか？ したいことはないか？ と目に入れても痛くないと言いそうな程の溺愛っぷりだ。勿論利用しないなんて勿体ない事をするはずがない。美味しいものをたーんと食べ、夜は大きなぬいぐるみに囲まれて眠った。我儘が通らなかつたことはない。だって私は公爵家令嬢なんだもの！

私が自分を勝ち組だと思つた所以は容姿だけのことじゃない。父は公爵様、私は公爵令嬢様なのだ。爵位でいえば一番上。王位を退かれた大公や王になる前の王子の次にこの国で偉いことになる。家は超デカイし、別宅だつてある。夏は避暑地で過ごすのだ。ドイツとかの城！ って感じではないけれど、全体的に四角くて、とにかく馬鹿でかい。塔はなく洋館ちつくな外観なのだが、とにかく広いのでやっぱり城だ！ ってなる。庭も広いし、綺麗に手入れされているし、敷地内に馬も鶏も犬も牛もいる。使用人だつてこんなにいらんじやないの？ ってぐらいいるし、この他にも別宅を管理している人たちもいるらしい。まさに、まさに人生勝ち組！！

これを人生勝ち組と言わずして何を勝ち組というのか！ 王様か？ お姫様か？ 否！ 王様なんて国を運営維持しなければならぬのだ。面倒くさいに違いない。平和な国のお金持ち。これが一番の人生勝ち組だと私は思う。この国は魔物の脅威に晒されちゃいるが、それが逆に国全体として一体感を生み、庶民が貴族に刃向かうことはない。貴族の女が軍に駆り出されることなんてありえないし、もう、高笑いが止まらないよね！ 楽しくって仕方ないよ！ なんだこの人生！ チートか！ イージーモードか！ あっはっは！

私の前世の話など、全く面白みの欠片もないので割愛させて頂く。

平々凡々を絵に描いたような人生で死んだ時すら呆気なかった。名前くらいはせめて忘れないでおこうと思っただけけれど、それすらも自信がない。前世に興味なんてないからね。もう、今が楽しすぎて楽しすぎて！ あっはっは！

しかし私のお姫様生活は5歳になった途端、呆気なく崩れ去った。まさか！そんな！ありえない！優しくてすっごくかっこよくて、何より私にベタ甘なお父様が、私にそんな苦難を与えるなんて夢にも思っていなかった。5歳の誕生日のあの日、お父様は言った。

「ララ、王女様とお友達にならないか？」

まさか娘がいや！ などと言うなんて微塵も思っていない笑顔だった。私はプレゼントの大きなぬいぐるみを抱えながら顔を引きつらせる。いやだ！ とんでもない！ ありえない！ 私と同年代の子供の、しかも、私より身分が高いヤツのお守りなんて！ 今まで貴族の子供に顔を合わせたことがないわけではないが、総じて子供は嫌いである。自分勝手に我儘で、躰がなっちゃんないがきんちよなど！いくら私の美しさに惚れたからといって、部屋の隅にいた蜘蛛を私にあげようとしてくる子供なんて断じて拒否する！ そんな私の我儘も今日まで許されていたのに……なんてこった、相手が王女様じゃあ、拒否権なんてないじゃないか！

「……ララ、おとーさまとおかーさまと、おにーさまたちがいればそれでいいの」

「でもララ、女の子のお友達が欲しくはないかい？」

いらねーよ！ 女友達なんて侍女がいれば充分だ！ どうせ私の美貌を妬むに決まってるんだし、将来その対処に追われることを想像すると身の毛がよだつ。大体王女っていうのがまず頂けないんだ。

私は自分より偉い人間が嫌いだ！ 絶望の表情をしてる私などお構いなしに、お父様はいけしゃあしゃあとのたまった。

「それにね、ララ、ララと王女様はなんと同じ日に生まれて、同じ名前を授かったんだ！ これは素晴らしい偶然だと思わないかい？

君たちは絶対仲良くなれるよ！」

同じ名前をつけたのはお前だろうが！ この野郎！！ ユウリカという名前なのに、愛称がララな理由はここにある。このお父様は、出産が同時期になるということで同じ名前になるよう画策したのだ。偶然生まれた日が同じになって、もう運命だとか思ったに違いない。かくしてこの国にはユウリカという名前の姫が2人居て、誕生日も同じである。お膳立てはバツチり過ぎるほどにばっちりだ。明日には王城に連れていかれるのだろう。まだ見ぬ王女様の高笑いが聞こえてきたような気がして、目まいがした。

## グリコピロレート公爵令嬢の黒歴史（後書き）

主人公がナルシスト過ぎてむかつきますか？

奇遇ですね。私もです。

8/21 主人公の容姿の色を変えました。自分で考えた設定忘れて色付きにしてみましたすいません。

## グリコピロレート公爵令嬢と王女の初邂逅

王城はまさに城！ という風貌だった。塔がいくつも立ち、堀が何層もあり、城下にあつた筈の我が家からかなり馬車に揺られた。王城どんだけ広いんだよ！ お父様に嫌味100%で「ねえまだ？」「まだ着かないの？」「ねえお尻いたいー」と文句を言っていたのだが、お父様は笑つて「魔物の侵攻に耐えなきゃいけないからね。広く強固に作つてあるんだよ」と笑うだけだった。もう、早く大きくなりたものだ。今じゃ機嫌悪くたつて周囲を和ませるだけのものでしかないのだ。美人の冷たい顔つてダメージあるよね！ 早くそうなりたい！

城の内部は重厚感があつて、空気が重苦しかった。子供が遊びに来るとこじやないな。外観や内装にこだわるよりも、実を取つていと目に見えて分かる城の作りだ。この国が長いこと魔物と戦争をしているのだとよく分かる。誰も馬車での穏やかな空気が嘘のように深刻な顔をしているので、自然私も黙る。私つて本当に素晴らし子供だよ。空気読めるし、分別あるし、賢いし。ふん、王女様だからつつて威張り散らしてるような馬鹿なら、影から操つてやるんだから、覚悟してなさいよね。なんてことを考えながらお父様に手を引かれて進む。お通夜のような雰囲気は苦手だ。馬鹿なことを考えたくない。自分のお葬式を思い出して辛いから。

嫌なことを思い出し、自らも葬式のような雰囲気醸し出しながら一行は進んでいく。くう、何か、何か違うことを考えよう。何でこの城はこんなに嫌な気分になるんだ？ 空気が重苦しすぎて、叫んで走りだしたくなる。お父様の手を握る自分の手が汗ばんでしつとりとしていて気持ち悪い。ぎゅっと力を込めれば、更に力を込めて握り返された。お父様の顔を見上げれば、困つたような顔をして笑っていた。

「この城にはね、魔法がかかっているんだ」

「まほう?」

「この城に慣れていない人間が来たら、記憶の中の、嫌なことを思い出させる魔法。その人がもし記憶喪失とかで記憶をなくしてしまっただけでも、この城に来れば一番嫌な記憶だけは蘇る。慣れればそんなことないんだけどね」

なんて城だ！ 今すぐ打ち壊した方がいいぞこんな城！ 前世の記憶では魔法はあり得ないことだったので、この世界での魔法の万能さに驚愕する。

「何その嫌なことを思い出させる魔法って！ ピンポイント過ぎじゃない!? 城にかける魔法じゃない!? むしろ魔王城とかにかかっているような魔法じゃない!?」

……はっ、思わず思う存分突っ込んでしまった！ お父様は目を瞬いている。周りの従者や王城の使用人も私を見つめてくる。何だお前ら、見んな。

「はは、確かに、その通りだ。でもねララ、魔物からしたら、この城がラストダンジョン、魔王城なんだよ」

そういえば、そうか。思わず間の抜けた顔になる。従者や使用人はまるで可愛らしいものを見るような目で私を見た。あー、うん、まあ、よかった。いつもの幼児っぽい喋り方じゃないのに気付かれてないのは、良かった。しかし私は時々こういうミスをする。人間と魔物が戦争をしている事実を、まるで前世のRPGのゲームの世界のように勧善懲悪の出来事のようにしてしまう。私たちは悪くない。悪いのは異形の魔物です。まるで小さな子供のように、そう思ってしまう。それを大人たちは笑って許して、諭してくれる。もう

何度目かになるその指摘を、何度注意させるんだ！ と怒ることなく。精神年齢では子供じゃないという自負がある私はそれにも戸惑う。注意されたことは1回で直したいのに、意識を改革することは中々に難しい。ううん、どうしても今日の私は話を難しい風に考えちゃうな。これも城の魔法とやらのせいなのかしら。

などと考えていたら、目の前はもう王女の部屋に繋がるドアだった。おいおい、勘弁してよジョニー。ヘイキャサリン！ じゃあ俺とドライブしようぜ！ それイイわね！ 私海が見たいわ

「ララ、ララ？」

「はっ！」

「大丈夫かい？ 気持ち悪かったりするかい？」

父親や従者、使用人が心配そうな目で私を覗きこんでいた。すいません、ちょっと海に行っていました。妄想の中で。

「ある子爵家のお嬢さんはこの城に来るなりいきなり泣き出してしまったらしい。ララはそんなことなかったけれど、大丈夫かい？」

やっぱりこの城子どもに悪影響じゃないか！ なんで連れて来たのお父様！ ひどいよ！ ちくしょう！！ しかし引き合いに出されたのが子爵家であっては、私は引き下がれるわけがない。私は公爵家令嬢ユウリカ・ベラドンナ・ララですよ？ 子爵家に出来ないことが出来て当然なのです。勿論、この城だって平気に決まっていますでしょう？

「へーきです。おとーさま」

にっこりと笑ってそう言えば、お父様は「さすが私の娘だ」といい子いい子してくれる。ふんと鼻をつーんとあげてまっすぐ前を見

据える。私は公爵家令嬢ユウリカ・ベラドンナ・ララなのよ。この城がいくら余所者に冷たい城だといっても、私に効くはずがないでしょう。なんたって私は、人生勝ち組なんですから！ 「さあ、行こうか」と言っただお父様がドアを押し開ける。部屋の中は光が溢れていたようで、零れ出る眩しさに目を細めた。

その部屋は壁一面がガラス張りだった。天井から床まで全てがガラスで出来ていて、その一面から光が溢れていた。目が慣れた頃、部屋の真ん中にちょこんと座る小さなお姫様に目が釘付けになった。この部屋には今までの武骨な城の中とは違い、洗練された私好みの調度品があるというのに、そのお姫様に圧倒された。そこには圧倒的な覇者がいた。顔は私の方が美しい、と浅ましい私の心が相手より優れている点を見つけようとする。覇者だと思っるのは、窓から溢れる光のせいだと思いきもつとする。しかし彼女はどう足掻こうとも紛れもない王者で、私より身分の高い覇者だった。王族とはこういうものなのか。目が怖い。爛々と輝き、私を楽しそうに見つめる目が怖い。無邪気なのにこりと笑うその様までも圧倒的だなんて、王族って怖い。ずるい。人生勝ち組って、私じゃないじゃん。こいつらのことじゃん。

私はまた前世の記憶のせいで間違っただの。昔は身分の差などなかった。生まれに多少の貧富の差はあっても、誰でも裕福で、頑張れば勝ち組なることが出来たかもしれない。あの世界とこの世界は違うのだ。この世界には、身分の差がある。どう足掻いても超えられない壁がある。なんだこの子供は。これがお姫様か！

お姫様が椅子をひよいと降りて私に駆け寄ってくる。逃げそうになる私をお父様の手が優しく止めた。行かせてよ、逃がさせてよ！ いやだ、この子嫌いだ。私より偉い子なんて、大嫌いだ。

「はじめまして！ あなたが、ユウリカ？ わたしもユウリカって  
いうのよ！ よろしくね！」

真つ黒な黒髪をサラサラと揺らしてお姫様は無邪気に笑う。うん、やっぱり、私の方が美人だわ。声だって、私の方が澄んでいる。

「ユウリカ」

お父様に促されて、ようやく私は返事をした。「……ユウリカ・ベラドンナ・ララ・グリコピロレートです、王女様」ユウリカ様、と呼んであげないのは私の意地だ。同じ名前が2人もなんていらないのよ。

「うん、ユウリカ・ベンドラナ・ララ・グリコね！　じゃあ、あなたはララね！　おなじなまえが2人なんてこややしいから、あなたはララね！」

「ああ、この子は家でもララと呼ばれてるんだ」

「まあ、ちょーどいいわね！　わたしは、ユウでも、ユウリカでも、どっちでもいいわ！」

早速名前を間違えられてるし、家名なんて半分に短縮されてしまっている。こややしいってなによ。ややこしいって言いたいのか？　私だって、ユウリカっていう名前なのに！　確かにユウリカよりララって言われた方が反応できるけど！　でも、断定されたのが気に入くない。しかし王女様と仲良くしたい父の手によって、話はどんどん進んでいく。ユウリカは王女様で、私はララだ。

「ララはすごいわねえ。なまえをぜんぶいえて、わたし、ぜんぜんおぼえらんないのよねえ」

「はは、王女様のお名前は仕方ないですよ。何せ王族ですからね」「もうっ！　グリコこーしゃく！　わたしは、ララとおはなししてるのよ！　こーしゃくがしゃべるせいで、ララがしゃべってくれないのー！」

「はは、すみません。では私は大人しくお茶でも飲んでいましょう」

「ええ、そうしてちょーだい！ ララ、いきましょ？」

最悪だ。何が最悪って、味方がいなくなった。いいじゃん。もうさ、私じゃなくてお父様とお友達になればいいじゃん？ ね？ もう私に構わないでくれ。私は今人生の理不尽さについて思考したい。上げて上げて落とすなんて、この世界の神は鬼か！ 鬼畜か！！ 修羅なのか！？

「ねえララ、あなた、まほうはつかえる？」

「え？ 魔法？」

いきなり何を言い出すのだこのお姫様は。子どもは脈絡がないから嫌だ。

「そう、まほう！ わたしはね、ちょっとつかえるのよ！」

そりゃあ、王族が魔法使えなかつたら一大事だ。大事だ。国家転覆レベルの大惨事だ。王族の名前がクソ長いのはそれが呪文であるからだ。王家の血をひくものが名前を正しく言うこと。これを発動条件にして、ある魔法が発動される。この国の人間なら誰でも知っている。

「ララはつかえる？」

こてんと首を傾げるお姫様。冷たくされることなんて微塵も想像してない顔だ。おいこんな顔見覚えあるぞ。昨日見た。

「使えないわけないじゃん」

ハツと鼻で笑ってやった。いや、使えないけど。まだ5歳だから

ね。王族と違って諸々の授業はそんなに切羽詰まってるのだ。お兄様達は小さいころからガンガン仕込まれたのかもしれないけど、私は蝶よ花よとのんびり育てられている。

しかし何を勘違いしたのかお姫様は、ぱあと顔を輝かせた。何よその顔、すっごく背中がゾクゾクする。

「すごい！　すごいわララ！　ぼうけんができるわね！」

そう言うなりお姫様は私の手を取って走りだし、ガラスにアタックした。ガラスが飛び散る。え、え、え、どういうこと？　子どもは脈絡がなさすぎるから困る。ほんとーに困る！　視界の端に呆然としたお父様の姿を見つけて、思わず手を伸ばした。

「たすけ、」

「どーん！！」

あろうことかお姫様は、ガラスを突き破って4階からダイブしやがった。

## グリコピロレート公爵令嬢と黒い竜

初めまして、そうでない方はまたお会いしましたね。どうも、ユウリカ・ベラドンナ・ララです。ララまでで名前です。家名はグリコピロレートといいます。爵位1位の公爵家に生まれ、今まで蝶よ花よと育てられ、すすくと育つのに不要な障害物は視界に入る前から取り除かれるお姫様生活を送っていました。公爵家令嬢とはそういうものです。貴族なんです。お姫様なんです。冒険などという二字熟語とは縁の欠片もない生活を送るはずなんです。それが一体全体どうしてこうなったんですか？ 要点をまとめてわかりやすく簡潔に、レポート形式にして私に提出しなさい。字数は1000文字程度で。

「イヤアアアアアア！」

木にばっさばっさと引っかかりながら、私は落ちていた。一体どういうことなの！？ わけがわからない！ わけがわからない！！ いや理由なら分かる！ 今隣で！ 楽しそうに笑っているこいつが私と共に4階のベランダから飛び降りたからだ！ ふざけるな！ 落ちたいなら自分一人で落ちろ！

やだ。やだ。速度早い。早すぎ。葉っぱ痛い！ 幹痛い！ やめて！ 傷一つない私の肌にごんごんかすり傷が出来ていくじゃない！ あんたらどきなさいよ！ どうせ無駄につたつただけでしょう！？ 邪魔でしょう！？ 今この時私のためだけにどきなさい！ 木めー！！ OH！ ジョニーイ！ イリユージョンよ！ イリユージョンが起きたわ！ キャサリン落ち着くんだ！ 落ち着けば大抵の物事は上手くいくんだ！ これはその例外ってヤツじゃあないかしらジョニー！ なんと、私の落下を妨げていて木が忽然と消失した。ウワアアアオ。OWATTA！ ダイレクトに私

は地面に叩きつけられた。

「ララ、ララ、だいじょうぶ？」

呑気な声がかから聞こえる。ふざけるこれが大丈夫なわけあるかボケナス。しかし私は大丈夫だった。打撲打ち身はひどいがピンピンしている。なんてこった！ 私は身体能力まで勝ち組だったのか！ さすが私！ 鼻血も出ていない。ホッ。美少女が鼻血なんてありえないよ。うんうん。じゃねーよ！

「いきなり何するの！？ 死ぬところだったじゃない！」

「わたしもまさか、まほーできをけすなんておもってなかった！」

けたけたと笑うお姫様は全くの無傷だ。何だこいつ。化け物か。思いつきり不審な目をしてたんだろう。お姫様はえっへんと鼻を鳴らしてえらそーに言った。三枚に下ろすぞお前。

「あのね、らっかそくどをちょうせつすれば、けがしないでおりられるのよー！」

「はあ？」

意味理解して言ってるんだらうか、このお子様は。

「あのねあのね、ふわってするイメージなの！ ふわって！ ぽーんて！ ぬいぐるみにぶつかるみたいに！」

「ああ、いや……ちよっと待って。私がさっき魔法を使ったって言った？」

「え？ うん、きをけしたでしょう？」

「……私が？」

「ララが」

待つてくれ。言っている意味が私はよく分からない。魔法っていつのは、何の手ほどきも受けてないガキでも扱えるものなのか？いきなり大木一本をかき消してしまえるような……確かに消える！とは思ったけれど。肌に傷がつくのが嫌で、心の底から消える！と願ったけれど。……私、すごくね？

「私すごいじゃん!!」

「まほーすごいよね!!」

「うん、すごいすごい!!」

初めてお子様と意見が通じた瞬間だった。何か間違ってるって？何のこと？世の中勘違いと理不尽で成り立ってるんだよ。テストには出ませんよ世界の常識なので。

「ね！ね！こっち!!」

そのテンションのままお子様は走り出した。2人で盛りあがった時に、手を取り合ってぴょんぴょん飛び跳ねていたので思い切り引っ張られる。ちょっと待てい！私はもうお父様の元に帰るのよ！上からちよう叫んでんのアンタ聞こえないの！？振りほどこうにも振り解けない。ねえジョニー！このお子様ありえないわよ！とんでもない力よ！オーウキャサルイーン！僕にそれを言うのかい？このリフティング高校生部門地区第1位の僕に！足も速いわよ！こっちはもうもつれてるわ！オーウキャサルイーン！僕にそジョニーうぜえ。

お子様は爆走し、右に左に兵を避け使用人を避け縦横無尽に走り回る。やばいもう道を覚えてない。このお子様こんな遠くまで一体何の用だ！くだらない用事だったらぶっ飛ばす！くだらない用事じゃなくても蹴っ飛ばす！

城の裏手にある森の奥に開けた場所があった。草はところどころ  
禿げ、木々はなぎ倒されている。そうして人工的に出来た広場の真  
ん中にでんと構える一匹の獣。嬉しそうに走り寄るお子様に呆然と  
しながらも手を引かれた。竜だ。とても大きい、黒い竜。前世では  
想像上の産物でしかありえなかった生物が今日の前に鎮座している。  
お子様を見た時の衝撃が、またあった。手を引かれていなかったら  
絶対に尻もちをついていただろうことが容易に分かるその圧倒感。  
大きくて、偉大だ。鱗の一枚一枚が綺麗に揃って並んでいて、その  
どれもが淡く光って美しい。全てが滑らかな曲線で形作られていて、  
贅肉だとか、無駄な肉は一切なかった。瞼がゆっくりと開いて、金  
色の瞳と目が合う。縦に一線すうっと瞳孔が通っていて、その線が  
目があった瞬間に細くなつた。

『ガキ、また来たのか？』

「きよーはね、おともだちをつれてきたの！」

『どうせ無理矢理連れて来たんだろう』

脳に直接響く低い振動。それはこの世界の言葉ではなかったけれ  
ど、何を言っているのかは不思議と分かった。気安げなやり取りを  
交わす竜とお子様を見て、頭を抱えなくなった。このお子様は、何  
てものを城に飼っていやがるんだ！

竜といえば、魔族の使い魔として筆頭に上がる生物だ。竜を見れ  
ばその背に魔族が乗っているとこの国の人間ならば思う。しかし目  
の前に居る竜は使役なんてとてもできそうにない。きっと竜の中  
でも上位に違いない。何なんだ、この状況は！ 何なんだ、このお子  
様は！

『おい、ソイツを連れてもう帰れ』

「えー！ きよー、きたばっか！」

『あーそうかい。だが俺はもう行くぜ』

背中が膨れ上がる。たたまれていた羽根は竜を支えるには些か役不足そうな小ささだった。小さい羽根を巧みに上下に動かして、竜は飛翔を始める。お子様が何かを喚いていたけど、もう聞こえなかった。吹きつける風が強すぎて、幼児の体なんて簡単に吹き飛ばされてしまう。転がって着地したせいであまり痛くはなかったけど。ていうか、なんであのお子様はこの風圧の中平気でいられるんだ！おかしいだろ！

『もうここには来ない。じゃあな小さいの』

「！！！」

『もう聞こえん。縁があつたらまた会おう。お前の場合は追っつきそうだがな』

「！！！」

最後に竜は私に一瞥を寄こして、顔を歪めた。私にはそれが笑ったように見えた。

竜が飛び去って行った後、兵や使用人たちが大量に広場に流れ込んできて、呆然とする私と泣き叫ぶお子様を回収した。当然どつちも散々に怒られたのだが、今回私に全くの非はなかった！しかし怒られた分量でいうと私の方が遥かに多い。おかしい。差別である。早く帰りたい。もう二度と王城には来ない。むしろしばらく部屋から出たくない。

## グリコピロレート公爵令嬢と王女の逃避行

最近ちよつとお父様のことが嫌いです。いつだって優しくて、私を甘やかしてくれていたのに、ことあのお子様については私がいくら嫌だ嫌だと泣き叫び喚いても問答無用で王城行き馬車に連れ込むのです。一步間違えば虐待ですよ！ 虐待！ こんなに美しく可愛らしくて可愛い私をあのお子様の方に連れていこうなどと！ ヲアカか！ ヲアカなのか！！ 昨日私を何をされたかお父様は目の前でみていたでしょう！？ なのに何故！ 何故だ！！ 何故私を嬉々として連れていくのよおお！

「良かったなあアラ。ユウリカ様がまたアラに来て欲しいって！」

ちくしょう娘の安全よりコネか！ コネ優先か！

私は今散々侍女使用人達と格闘したせいで服はぼろぼろ、髪は鳥の巣、顔はこれ以上ないってくらいむくれている。お父様の言うことなんかは耳を傾けてやるものか！ 私は怒っている！ しかし無情かな、馬車はもう王城へ着こうとしていた。侍女が何とか身なりを調べようと必死だ。そんなことはいいから私を連れてこの馬車から逃避行しようぜ！

「アラ、いい加減機嫌を直しておくれ。帰ったらアラが欲しいものをなんでもひとつあげよう」

「もう二度とあのお子様には会わなくていい権利が欲しい」  
「アラ」

お父様が困ったように笑う。そりゃあね、相手は王族だ。忠義を尽くさなければいけない相手だ。この国の貴族である以上王族の命令は絶対で、拒否なんて出来ない。だったら仲良くして優遇しても

らったほうがいいに決まっていると、私も分かっている。私は女だから、いずれ公爵家ではなくなる。同じ公爵位か、格下の身分の爵位のもとへお嫁にいくだろう。その時のために、王族というコネクションを持っていれば私は絶対的優位に立てる。引いては私のためなのだ。分かっちゃいる。分かっちゃいるけど！ 私は！ あんな我が儘・人の話を聞かない・自分勝手娘とお友達になんぞなりたくはないわ！ 竜だぞ！ 4階から飛び降りるんだぞ！ また今日も絶対ろくでもないことをさせられるに違いないんだ。やだ。やだやだおうち帰るー！！！！

「ララ！ きてくれたのね！」

私が入室するなり抱きついてきたお子様はそのまま絞め殺さん勢いで力を入れてくるので必死で抵抗した。こいつほんと、力強い！ ！ 何この無駄な力！ いらねえだろ！！ 後お前が王城に來いって言ったんだからね、そしたら私たち貴族は命令に従うしかないんだからね、お前もうちよつと自分の発言力について理解した方がいいよ。

「ララ、ララ〜！」

ぎゅうと私にくっつくお子様を見てお父様や侍女や王城の使用人や王城の侍女たちが和やかに微笑む。ふざけんな！ 助ける！ 私は内蔵が飛び出す一歩手前だ！

「あのね、ララ！ きょーはね、おままごとしよう！」

お、なんだなんだ今日はちゃんと普通の遊びじゃないの。そうだよ4階から飛び降りたり竜と仲良くなるなんて非常識なことはやめ

てちゃんとした子どもらしい遊びをなさいよ。私おままごととか嫌いだから付き合わないけど。

「こつちこつちー！」

「は！？ ちよつ、待て！」

違うおかしいお前どこ向かってる！？ どこ向かってるソレまたガラスだよね！？ 一面ガラス張りのガラスにまた突っ込もうとしてるよね！？ ちよつ、スピード速いつ！ 速すぎ！ やめ、やめてえええつ

ガツシャーン！！

昨日に引き続き本日もガラスを突き破り4階からダイブして木々とやあこんにちはまたお会いしましたね、状態な私です。ふざける横でお子様「ふーせんだよ、ふーせん！」と無駄に力を入れて言ってくる。何でこの風圧の中お前ははつきり言葉を喋れるんだ。私は顔が痛くて痛くてしゃーない！ それもアレか、魔法とやらの力か！ 私はそんなもん使えないわ！！ しかし魔法を使わなかったら木々は痛いわ地面との熱烈チューが待っていること間違いない。頑張れ私！ 素晴らしい私ならきつと使いこなせるに決まっている！ 風船だ！ 風船なのだ！ふわつと私を受け止める風船！！

結論から言つて、私は魔法を使えなかった。地面と激突したおでこが痛い……。あ、血出た？ そりゃ出るよ、当たり前だよ。すごい痛かったよ……。私があまりの痛さにえぐえぐと泣いている隣でお子様はピンピンしている。今まで認めたくなかった現実が私にありありと突きつけられてくる。つまり、私は凡人だったのだ。ただ前世の記憶を持っていて、公爵家に生まれて、母親が美しかったといっだけの。天才というのは、人生勝ち組というのは今私の怪我を必死にハンカチで拭こうとしているこのガキなのだ。ガキの力が強す

ぎて頭がグラグラする。やめ、やめろ、気持ち悪くなってくるだろ！ もうやだ。昨日からいいことなんてない。もう人生やめたい。

気分が急下降していく私と反対にガキは急に慌て始めた。遠くから誰かの声が聞こえて来たからそのせいだろう。もう地面から一歩も動かない気でいる私を圧倒的力の差で強引に引き剥がすと、ガキは私を背負って走り出した。私とガキは5歳児だ。いくらガキが規格外の麒麟児でも5歳が5歳を背負うなんて無理がある。背中乗り心地は最悪だった。先ほどまで治療と言うにはおこがましい顔面シエイクを受けていたので限界はすぐ訪れた。ブチ切れていた私は相手が王女様だというのも忘れ、ガキに強烈な頭突きをお見舞いしてやった。そしてすぐに後悔した。王女はそんなことじゃ止まらなかつた。気づいもないかもしれない。切れてたんだもんね、冷静な判断なんか出来ないよね、うん。と自分を慰め、盛大な頭痛を理由に私は意識を手放した。

## グリコピロレート公爵令嬢と黒い竜2

空が青い。記憶にある前世の空は、もっと白くて、水色の空だったように思う。青がとても深くて、綺麗。いつも家から見る空とは違い、見渡す限り一面の大空だった。

……………ここは、どこだ。

ララの下にはまだ若い草むらがあつた。太陽の光を受け、青く瑞々しい。見渡す限りの大自然！ 遙か遠くはなだらかな坂になつていて、ララがいた場所を頂点にして盛り上がっているのがわかる。

もう一度言おう。ここは何処だ。そして、あのバカはどこだ。

わー綺麗な緑！ 皆元気ねえ。あつ、小鳥さんがいるわ！ お待ちになつて〜ウフフフフ〜！ なんてこと、ララは絶対にしないでらう。無邪気になるには彼女は精神年齢が高すぎた。ただ自分が置かれた現状に頭を抱えるばかりである。ちなみに、未だに頭痛はやまず、ララは大変機嫌が悪い。立ち上がって辺りをうろつけばここがどこだか分かつただろうが、頭痛を抱える今は体勢を変えることすら億劫で、ララは未だ寝転んだままである。ここはイカタ山。小さいが異様によつきりと伸びた山で、斜面は90度になることもあるという、普通の人間には登れない山である。ララが坂を見に行けばあまりの斜面の急さに目眩がしただろう。体調の悪い今はそのまま転がり落ちてしまったかもしれない。生命の危機だ。勿論、ユウリカ王女がララをここまで運んで来た。ララを頂上に置き、忘れ物を取りに帰って、城の人間に盛大にお叱りを受けている最中である。ララは、大自然の山の上で一人置き去りだった。頭を押さえながらララは呻く。

「クツツツソガキ、地獄に墜ちろ……………」

周りに大人がいたならば、不敬罪必至な暴言である。彼女が一人きりで本当に良かった。しかしララは早急にこの山を降りなければならぬ。この山には動物が住み着かないので、野獣に襲われる心

配はない。しかし、この山に動物が寄り付かないのには訳があるのだ。このイカタ山は竜の休息所という別名がある。竜が来るのである。

『ほう、昨日の童ではないか』

ララはその声を聞いて、閉じていた目を開け、自分に語りかけてきた相手が誰だかきちんと確認した後、心の底からユウリカ女王へ思い浮かぶ限りの罵詈雑言を並べた。その言葉をここに羅列することは出来ない。言えることはひとつ、彼女は生前お育ちが大変悪かったであろうということだけだ。

ララがいるせいで山に降り立てない竜は不細工な羽根を動かして山の上空に浮かんでいる。頭を押さえて唸るララを見て、首を傾げた。

『頭が痛むのか？』

至って普通に話しかけてくる竜を相手にララは困っていた。竜は普通、魔族側に位置する生物として知られている。敵なのだ。なのでララはどう対応したものか迷っていた。穏便に何もせず、このまま興味をなくして何処かに行ってしまうかなあと考えていた。そういうことにしておいてくれ。しかし心を読むという技など特に会得していない竜はそんな心が分からないわけで、更に言葉を続けた。

『何か喋ったらどうだ？』

「ハア？」

あ、今のなかったことにしませんか？ え？ もう無理？ ああ、そうですね。はい、分かりました。ええ、はい。もういいです。す

みません。

『我は今童に話しかけている』

「何で私があんたと仲良くしなきゃなんないわけ？」

「すみません、あの、せめてピー音は……あ、無理ですか。そうですか。ああ……」

『機嫌が悪そうだな』

竜は何故か笑いながらそう言った。え？ 何で人間以外の生物の感情が分かるのだった？ そりゃあ竜だってね、おかしければ笑いますし悲しければ泣くんですよ。当然じゃないですか。鬼じゃありませんからね。え？ 鬼は笑わないのだった？ いや笑いますよ鬼だって。……あの、この話題やめにしません？

「どっかの誰かさんのおかげでね！」

吐き捨てるようにララは言います。本当に頭が痛そうです。しかし竜は笑っています。

『……ユウリカの相手は大変だろう』

「ただつれ回されてるだけなのを相手をしているというのは正しいのか？」

『今までアレの相手ができるやつはいなかった。誰もが1日で役目を投げ出した』

「おい、人の話聞けよ」

ああ、ああ、竜相手にそんな口を聞いて！ しかしこの竜はそんなことじゃ機嫌を損ねたりはしません。ララ！ そのことに深く感

謝しなさい！ 感謝して土下座しなさい！ さあ！

『アレは今までずっと一人ぼっちだった。次々と母が代わり侍女が代わり使用人が代わり、アレの側に留まれる人間は居なかった』

「いやいきなりどうした」

『お前以外のやつではアレについていけないだろう』

「ねーよ」

『そうか？ 人と逸脱しているという点では、アレもお前もさして変わりはないだろう』

ララはその時初めて竜に興味を持ったように視線を向けた。藍媚茶色の目が鈍く輝く。幼女の外見には凡そ似つかない瞳の輝き方だった。

静かにララは問いかける。

「今、なんて？」

『我には解る。その小さな外見に押し込められた魂が、見た目通りの形を成していないことが』

「……へえ？」

『このことをアレに教えてやれば、今以上にお前に付きまとして大変だろうなあ？』

にやにやと意地悪く晒う竜を視界に収めて、ララは分かりやすく嫌悪を示した。随分と俗物的な竜だ。我とかいう一人称を使っておきながら、なんと性格の悪いことだろう。……そろそろナレーションの役代わってもらえませんか？ ええ、はい、ちよつと彼女の心の声が耐えがたいというか、こんなに可愛い子からあんな言葉聞きたくなかったっていうか……、はい、私しかいませんよね。はい。すいません。はい。

「【放送禁止用語です】竜め。冥府に墮ちろ」  
『我はアレが割と気に入っているな。気にかけているのだ』  
「じゃあアンタがああ、の糞馬鹿と一緒にいてやればいいじゃん」  
『そういうわけにもいかない。アレが王女である限りは』  
「あの糞馬鹿は王女なんてしてるから余計性質がわりいだよ。そんなん捨てさせちまえっつーの！」  
『言っつていいのか？ アレに、お前のことを』

ララは盛大に舌打ちをしました。頭の中は依然竜への悪口で一杯になっていきます。もうこの仕事辞めたい。女の子に幻想を抱いて生きたい。

『もうすぐアレが帰ってくる。アレの名前を呼んでやってくれ』

「何で私が」

『アレはユウリカと呼んでもらったことがないのだ。頼む』

ララは竜を鼻で笑った。

「そんなの、私も一緒だけど！」

ララの名前はユウリカ・ベラドンナ・ララという。本来なら愛称はユウリカから取るのが正しいのに、父親の意向で3番目のララから愛称が来ている。そのことにララは少なからず不満に思っていたし、その元凶となったユウリカ王女を良く思っていなかった。その自分が、彼女をユウリカと呼ぶなどと！ 例え天地が引っくり返ったとしてもやらないに違いない。が、今ララが相対しているのは竜である。ユウリカ王女を気に入ってる、ララ曰く、幼少期に性格がねじくれ曲がってそのまま大人になった底意地の悪い竜である。先ほど殊勝にも頼むと言っていたのに、あっさりとお願いは脅迫に替わった。

『では、呼べ。命令だ』

ララはこの世界で生まれてから今まではつきりと命令されたことは一度もない。拒否権のないお願いはあれど、はつきりと『命令』と言われたことはないのだ。公爵家に生まれ容姿にも恵まれたララにそんなことを強要する人間はいなかった。初めて味わう屈辱にララは身を打ち震わせる。糞！　バラされることがなんだっていうんだ！　今まで以上に王女に付きまとわれる！？　そんな確証どこにもないじゃないか！　しかし1%でもその可能性があるのならば、ララはその可能性を潰すことに身を費やすしかなかった。会ってまだったの二日だが、ユウリカ王女がララに与えた恐怖は大きい。

『ではな。またお前には会いに来よう』

「二度と来なくていい！」

強風を巻き起こしながら竜は去って行った。ララは結局終始横たわったままである。完全に竜を舐めている。すいません、いつもはこんなんじゃないんです。ただ今日はちよつと具合が悪くて……、はい、頭痛が酷いようです。ええ、原因は分かっています。ユウリカ王女の石頭に自ら頭突きしてしまっただけです。はあー、しかし、ようやく竜は行ってくれましたか。ほんと良かったですよこれで私の仕事は終わりってもんです。今回は彼女の心の声がありません。いつも酷いものだったので仕方なく私が呼ばただけですからね。いつもは全然、まったく、関わることもない存在ですから！　私は全然違う仕事を押し付けられて全然勝手は分からないし、途中から私の本音も駄々漏れになっちゃうし……もういいことなんかないですよ。ええ、私のことなんか綺麗さっぱり忘れてくださってけっこうです。ええ、ええ！　それではお暇させて頂きます。こたびのユウリカ・アルバ・ララの所業、何卒目を瞑って頂けると幸いです

ございます。いつもはもーちょっと、猫を被れる子でございますので。ええ、お約束しますとも。ですから何卒何卒、此度のことはどうぞ記憶から抹消させて頂きたく……え？　なら何でこんな話書いたかつて？　それはララがユウリカ王女をきちんと名前で呼ぶ羽目になった顛末だからでございます。ちなみにララはこの後、迎えに突進して来たユウリカ王女を不承不承名前で呼んでやって、感動の余り全力で抱きしめられて肋骨を折る重傷を負うのでございますが、そんなことはもう私の知ったことではないので割愛させて頂きます。職務怠慢じゃないか？　最後まで仕事をしろ？　知りませんよそんなのこれそもそも私の担当じゃありませんし。文句は担当のデスクに置いておくので文章にして提出して下さい。それでは皆さま、本当に御機嫌よう。またお会いすることはないでしょう。

## グリコピロレート公爵令嬢と魔導書

「やあ、皆大好きグリコピロレート公爵家令嬢ユウリカ・ベラドンナ・ララちゃんだよ。元気にしてたあ？ 私はちよつと今ね、具合がよろしくない。ユウリカ・糞馬鹿・オウジョサマ（笑）のとなでもない馬鹿力のおかげで、肋骨がバキボキに折られちゃったんだよ。いやあ、本当に……本当ッに天国の門を開きかけたよ？ ヤツを呪う暇もなくオチたよ？ 普通に死んだと思っただもこうして元気にベッドの中で朝を迎えられているので、魔法つてすごいなと思う。全然背中が痛くないんだよ！ ちよつとこれは、本気で魔法を学ぶべきかもしれない。私の生命維持のために。真剣に。」

私を起こしに来た侍女に、治療してくれた人間の名前を聞いて愕然とした。私を治療してくれたのは王宮お抱えの魔術師だということだ！ なんてこった！ また王城に行かなければならないのか！？ 何でも、呆気なく意識を失った私を見て動揺したユウリカ・ド阿呆・オウジョサマが国一番の魔法使いの元に走って連れて行ったらしい。確か今のNo.1は攻撃魔法が得意だった筈だけど、何でもできるのだろうか。すごいなあ、魔法使いって。ユウリカ・ベラドンナ・ララ、この世界に来てから初めて他者へ尊敬したのだった。

お父様が今日は王城へ行かなくていいと言う。ユウリカ・おたんと茄子・オウジョサマが5歳児にしては気を使って、養生するようにと自宅待機を言い渡して下さったようだ。正直治療のおかげでピンピンしているので、ユウリカ・ファツキン幼女・オウジョサマには全くもって会いたくはないのだが王城には行きたい。ということでお父様をお願いしてみることにした。

「おとーさま、ララ、まほーつかいさまにあいたい！ ありがとう

つていいたいの」

「そうだなあ。明日会えるように手配しておこう」

「やだ！ きょーがいい！」

お父様は困ったように笑った。「うーん」と唸っている。そうだ、もつと困れ困れ！ 私に散々無理難題を強いてるんだからこれぐらいの我儘聞いてくれたっていいだろう！？

「そうしてしまうと、ユウリカ王女様とも会うことになってしまうけれど、いいかい？」

「嫌だ」

光の速さで返事した。というか、お父様、私がヤツを嫌ってるって分かってるんじゃないか！ なのに今まで笑顔で引き会わせていたのか！？ なんて腹が黒いんだ！ 汚いさすが大貴族汚い！！ 私が地団太を踏んでいると、お兄様が口を開いた。

「お父様、我が家にお招きするのはいかかですか？」

「！！ おとーさま！ よんで！ よんで！」

「うーん、そうだなあ。招待状を送ってみようか」

お兄様ナイツツス！！ いつも影薄いなとか思ってたてごめんね！ いつも居ても気づかなくてごめんね！！ 大好き！！ 渾身の力で抱きつけば細い腕が抱きしめ返してくれた。一番上の兄、アトロピンはあまり武芸に明るくない。人当たりが良く顔もいいので侍女使用人たちの間では評判はいいのだが、私と二番目の兄と比べると手がからなさ過ぎてよく存在を忘れられる影の薄いお兄様だ。将来はその優しさで数多のお嬢さんを虜にするんだろつなあ。お兄様の胸に頬をすりすりしながら思いつきり甘えた。ちなみに最近お父様には一切触れていない。当然だよな。触れるわけNAKUNE

！？ ユウリカ・すかぼんたん・オウジヨサマとのコネ作り以外では基本的に私に甘々な親馬鹿お父様はお兄様と思う存分イヤイヤする私達をそれは羨ましそうな目で見てくる。そんな目で見られなくても良心は痛まないわ！ あーっはっはっは！

「ララ、背中はまだ大丈夫かい？ 君が肋骨折られて帰ってきたなんて聞いた時は目の前が真っ暗になってしまったよ」

「もうぜんぜん、いたくないのよ！ まほーつかいってすごいね、おにーさま」

「そうだね。私たちの可愛い可愛いお姫様に傷が残らないで本当に良かった」

「うん、本当に」

ことお肌関連の話をする時のララは真剣である。5歳児がするよくな表情でないことはこの家の者全てが思っていたが、誰も突っ込みはしなかった。可愛ければいっかーというお気楽っぷりを発揮している。

「でもね、またおーじよさまにあつたら、もつとけがするかもしれない。ねえおにーさま、わたし、おしろいきたくないよう……」

父で駄目なら兄を陥落しろ作戦である。うるうると瞳を潤ませて上目遣いに見上げればイチコロだ。この奥の手を使って陥落しなかったこの家の者はいない。お父様もお母様もお兄様達も使用人達も皆この手に引っかけた。お父様に王城行きのことでのこの手を使わなかったのは、使っても無意味そうだと理解していたからだ。奥の手が敗れた時、人は多大に精神にダメージを負ってしまうので。

「お兄様だって、ララを怪我なんてさせたくないさ！」

アトロピンお兄様はララをぎゅうつと抱きしめた。ララが小さくぐえ、と洩らしたので力を弛めながら更に続ける。

「けれどね、ララ、私たちは公爵家だ。貴族の中で、爵位が最も高い家柄なんだ。つまりそれだけ王族に近いということなんだよ」

小さな子どもに言い聞かせるようにアトロピンは言う。目はしっかりとララに合わせて、真剣な目で。

「分かるかい？ 私たちにとって、王族は絶対で、神なんだ。私たちは王族の願い事を叶えなければならぬし、喜ばせなくてはならない。何故だかわかるかい？」  
「いいえ、おにーさま」

分かってても絶対分かったとか言いたくありませんお兄様。お兄様とお父様の顔はあまり似ていないのに、それでもそっくり同じように困ったような笑顔をした。

「ララ、君は私たちのお姫様だ。目に入れても痛くない、可愛い可愛いお姫様。でもね、世間的にはそうじゃない。この国でお姫様扱いをしてもらえるのは、ユウリカ王女様だけなんだよ」

ひどい衝撃だった。このお兄様が、一体何を言っているのか理解できない。何ということだろう！この兄は、まだたった5つの子どもに、世間の非情を説いて聞かせたのだ！ なんとということだろう！ なん……うわああああ！

あまりの動揺にララの瞳からぼろりと透明な雫が流れた。それを見てアトロピンは大いに慌てる。しかし、彼がハンカチを取っている隙にララは彼の膝の上から逃げ出し、部屋から走って出て行ってしまった。

「ララ……ッ！」

「アトロピン、ララはあんなに小さいんだ。はつきり言い過ぎだ」  
「……はい、すいませんでした」

とか後から言うくせに、お前止めなかったじゃねえか。と公爵家当主に突っ込むことができる人間はこの場にはいなかった。

ララは自室に戻って泣いていた。うるたえる侍女がララの横で右往左往しているが、今のララは彼女に構ってやる暇はない。あんなことを5歳児にいう兄なんて！ お兄様なんて大嫌い！ ぐらい言っつてやれば良かった！ とララは鼻水まみれの顔で考える。どうやら涙を我慢しようとして、代わりに鼻水が出てきてしまったようだ。クッションを盛大に鼻水まみれにしながら、ララは自分の世界がガラガラと崩壊していくのを感じた。

何でも持っていると思っていた。

何でも持っていた筈だった。

公爵家という地位、美しい容姿、前世の記憶という知識。この3つが揃っていれば、何でも叶うと思っていた。

思いあがった少女は愛されていたはずの兄に高くなっていった鼻をバキバキに折られ、今やその鼻は鼻水を垂れ流すだけだ。

少女は誓った。偉くなつてやると。誰からも命令なんてされることもなく、理不尽なお願いを無言の圧力で了承させられることもない存在になってやる！ 絶対だ！ さて、そんな存在はこの国ではほんの一握りの人間……その一握りの人間でさえも俤ならないことは往々にしてある、ということにこの少女が気付くのはいつのことになるのやら。決意を固める少女の瞳は闘志に燃えていた。鼻水まみれの顔でも、瞳の輝きだけは一流品の少女であった。

「今晚はお招きありがとうございます」

きつちりと上位貴族に対する礼を取るアルバ魔法王国第一位魔法使い、ロジンをグリコピロレート公爵は家族全員で迎えた。ロジンは着込んだ礼服を窮屈そうにしている。魔法使いという割には彼は体格が良く、既製服ではサイズが合わないようだった。既製の礼服を着ていることから、彼が貴族でないことが分かる。貴族ならば例え末端の男爵家でも、オーダーメイドの礼服を一着は持っているものである。

「この度は我が娘を助けて頂き、ありがとうございました」

「いえ、私は王女様の命令を聞いただけに過ぎませんので」

「娘が貴方にお礼がしたいと言って聞かないもので。ほら、ララ」

当主に導かれ、ララはロジンの目の前に出る。優雅に子女の礼をこなしてロジンに笑って見せた。

「ユウリカ・ベラドンナ・ララです。わたくしのけがをなおしてくださいって、ほんとうにかんしゃしています。どうもありがとうございます」

「これはこれは、ご丁寧に、どうもありがとうございます」

どの世界でも、幼女が拙い言葉で一生懸命にお礼を言う姿は微笑ましく映る物である。例えそれが演技であったとしても、綻びがなければ相手は気付かず、幸せに頬を緩ませるだけだ。ロジンも当代きつての魔法使いであるが、その中の一人だった。

彼はララの背丈に合わせて体を屈め、その愛らしい顔をよく見ようと顔を覗き込んだ。そして毒気の抜け切った顔で微笑み、「美し

「いお嬢さんだ」と言う。それを受けてララは「おじさまも素敵だわ」と類にキスを落とす。このロジン、年はもう30を超えているのでおじさんは正しい。自分に孫が生まれたらこんな感じだろうか？

と思考しかけた時に目の前からララが消えた。公爵家長男のアトロピンと次男のスコポラミンに取られたのだ。見れば彼らは敵意をむき出しにしてロジンを睨んでいる。その様すらも微笑ましいと彼は笑って、公爵に話しかけた。

「素晴らしいお子さん達ですね」

「はは、ララは我が家のお姫様なもので。こちらへどうぞ。夕飯を共に」

「お心遣い、感謝いたします」

通常より1・3倍ほど豪華になった夕飯の席で、ララはロジンに色々な質問をした。魔法のことについて根掘り葉掘り、時には本当にこの子は5歳なのだろうか？ とロジンが首を捻ってしまうような際どいものまで。今のララには形振り構っている余裕はないのである。今までは外見と中身が釣り合っているような言動、行動を心がけるのが第一優先だったのだが、今では違う。自分の身を守るための行為が第一優先だ。あのユウリカ・すかぼんたん・オウジヨサマのことだ。4階からガラスを突き破って飛び降りるのが日常となっている可能性は大いに有りうる。つまり、一刻も早く魔法を身につけなければ大怪我一直線だ。昨日の二の舞だ。その思いがララに演技を捨てさせた。持てる知識と手管を使って、時に甘えて、時に大胆に、ロジンから知識を吸収した。彼女は前世では詐欺師紛いのことをしていたに違いないと思わせる見事な手腕だった。

魔法に必要なのは思い込み、なのだそう。正しく呪文を発することでも、杖を手を振ることでもない。「私」が魔法を使ったら「こう」なると思ひ込むことなのだそう。呪文はイメージしやすく

するためのもの、杖や手の動作もそれに同じ。何百年か前に実在した稀代の魔術師、タキソールの残した魔導書は才ある者にその魔法を使う為のイメージを植え込み付けさせるためにあるという。魔導書は人を本の中に引き込みイメージを思うままに操るために、様々な試練を与えるという、とても危険な代物だとも。魔導書は城にほぼ全てが管理されているらしい。才能ある物が無暗に本に引きずり込まれてしまわないように、厳重に管理されているのだ。

思い込みというのは、子どもの方が得意である。ユウリカ・くそつたれ・オウジヨサマが魔法を使えるのもそのせいだろう。前世で人生の酸いも甘いも経験して、人間には出来ること出来ないことがあると知っているララにはとても難しいといえる。そこでララはある一計を案じた。笑顔でロジンを見送りながら、ララはほくそ笑む。魔導書に入ってしまったえば、魔法を覚えられるし、一時的に王女から逃げられるじゃないか！ 魔導書がどんなものか知らないが、あの王女と一緒にいることとどっちが苦痛を感じるだろうか？ 答えは後者だ！ 当たり前だろう！ 魔導書はやりきれば魔法を覚えることが出来るのだから！

王女を出し抜き、いかにして魔導書のある部屋へ忍びこむか、ララは一晩考え続けた。

そんなララの計画は、ユウリカ王女の前では全くの無意味だった。

「イヤアアアアア！」

「アアアア〜！」

ちなみに上の悲鳴がララで、下の叫びがユウリカである。わざわざ注釈をつけるまでもなかった。王城に辿りつき、ユウリカの部屋に通された時点でララは以前とは少し違った。そしてユウリカも少し違った。ララの身を慮りながらも何故か内緒話をしたいような素振りを見せるのだ。そこでララは手を打ち、部屋にいた侍女と使

用人を呼びよせた。

「何でしょう、お嬢様」

「ひみつのはなしをしたいのです。たいしゅつなさい」

「恐れながら、それは出来ない相談でございます」

「わたくしに、また、4かいからとびおりると？」

そう言い放った時のララ様のお顔はとても直視できるものでは御座いませんでした……と後に侍女は語った。こうして部屋を無人にしたララだったが、それにユウリカが大人しくなったのは3分だけだった。いや、3分も彼女を大人しくさせたことはこの城では奇跡である。素晴らしい！ 侍女使用人たちはララを尊敬の眼差しで見つめた！ しかし悲しいかな、3分だけである。その時の2人の会話はこうだ。記せるのは会話のみだと言っておく。侍女使用人たちがいない部屋では、ララは……これ以上は私の口からはとてもとて

「あのね、あのね、ララは、りゅうにあった？」

「……ええ」

「ほんとう！？ あのね、きのう、りゅうをせつとくしよーとおもつてたのー！」

「へえ」

「わたし、りゅうとあいたいの。だから、あのやまにいったの」

「ほお」

「でもあえなかった。わたし、ララがうらやましい」

「ハハッ」

「あのね、りゅう、なんていつてた？」

「ユウリカのこと嫌いだってよ」

「うそ！」

「もう会わないとも言ってた」

「そんな！ うそよ！」  
「そんなことより私魔導書に興味あるの」  
「まどうしょ？ うん、しってるよ」  
「何処にあるか、分かる？」  
「うん！ つれてってあげるね！」  
「いや、いらぬ。場所だけ教えて」  
「わかった！」

その後が、あれである。ユウリカ王女にはまだ場所だけ教える、という行為は難しかったようだ。場所を教えるイコール連れて行くという方程式なのだ。そんなわけで、ララとユウリカはガラスを突き破り4階からダイブした。子どもの短絡的思考を計算の内に入れていなかったララの落ち度である。ていうかこれが一晩練った策略なのだろうか。お粗末にも程があるぞ、ユウリカ・ベラドンナ・ララ。これじゃあユウリカ王女に勝てる訳がない。そんなわけで、ララは今日も元気に4階から落ちていった。

## グリコピロレート公爵令嬢と魔導書2

お約束のように地面に人型の穴を作って、ララは地面にめりこんだ。今まではめりこんだりしなかったのに、何故だ！ ユウリカ・頭くるくるパー・オジョウサマにちよつとした仕返しをしたせい！？ あんなのちよつとしたお茶目じゃない！ その証拠に話すり変えたらあっさり前の話題忘れたじゃない！ あの子頭ちよつと弱んじゃない！？ ていうかていうかていうか、チョーー痛いんですけどオーー！！

「ララー、だいじょうぶ？ なんか、うまってるけど……」  
「だアーれのせいだと思ってるのよ！」

ユウリカ王女に反応するために、ララは根性で跳び起きた。穴を覗き込んでいたユウリカ王女は跳び起きたララを見て楽しそうに笑う。この王女も王女だが、なんだかんだ言っついていけるララもララだ。そのことにララは気付いているのだろうか？ 実際、ユウリカ王女の傍にいた人間達の中でこんなに長い間無事でいられた者はいない。

「まどうしょ！ こつちよ！」  
「ちよつ、引つ張るな！ 腕がもげるわ！」

だからユウリカ王女は今がすごく楽しいのだった。自分に付き合ってくれる人間がいる。会話をしてくれる人間がいる。楽しい！ すごく楽しい！ そんなわけで、王女は楽しさの余りいつもより余計に力を発揮してしまっていた。いつもの王女に王城の分厚い壁を何枚も突き破っていく威力はない。なかった……答だ。

何枚も壁を突き破り、階段を駆け上り、城の西に位置する塔の一

番天辺に2人は辿りついた。ララの頭には壁の欠片がついていたし、階段で散々バウンドさせられたため満身創痕の状態だったが。

「ここ！ここにまどうしょ、あるのよ！」

「……アンタに案内頼んだ私が間違いだっただわ」

到達経緯があまりにも非常識すぎて、今や城内は大パニックである。ここに兵が追い付いてくるのも時間の問題だろう。ちなみにここに至るまでに何人かの兵を轢いている。人間が人間を轢くってなんだよ。おかしいだろ。

魔導書を収めているという部屋は嚴重な扉で支配されていた。繊細で美麗な見事な装飾がなされてあって、無暗に触るのも気が引けてしまうほどの扉だ。そして、取っ手が無い。どうやって開けるんだ、これ。

「何これ。取っ手無いじゃない」

「これね、まほうであくのものよ」

「魔法で？」

これは困った。私じゃ開けようがない。横目でユウリカ・筋肉馬鹿・オウジヨサマを見る。……溢れんばかりの笑顔である。本当に邪気が全くない笑顔で、こっちの気が抜ける。……コレが壁を突き破って兵を轢いて進んでいくんだもんなあ。恐ろしいよなあ。

「アンタ、これ開けれる？」

「あけれるよ！」

「じゃあ開けて」

「うん！」

ユウリカ・破壊魔・オウジヨサマは扉の前に仁王立ちし、手を扉

にかざした。深呼吸して、舌つ足らずな口で呪文を唱えた。

「ひらけえー、マゴー！」

「孫なのかよ！！！」

しかし扉は見事に開いたのだった。

扉の中には、丸い部屋が広がっていた。窓はなく、全ての壁に本棚が並んでいる。しかし本棚の座高が低いので、恐らく1メートルくらいだ。あまり本に囲まれているという気はしない。本棚の上は窓がぐるりと並んでいるし、解放感はある。本棚に並んでいる本は皆一様に同じ厚さ、同じ紺色、同じ装丁の本が並んでいる。ところどころ抜けている箇所があるのは、きつと盗まれたという本が元あったところだろう。金糸で縫いとられた文字だけが本を見分ける目印だった。

「これが、魔導書……」

至って普通の本である。とても人間を中に引き込んで無理難題をしかけてくるような本には見えない。そもそも、本の中に人を引き込むとはどういうことなんだろう？ 小さくなって、ぺらぺらと平面になって、文字の中を泳ぐのか？ 自分の想像力の貧相ぶりに嘆きたくなった。

「とじろおー、マゴー！」

後ろでユウリカ・ぼけぼけ・オウジヨサマがふざけた呪文を言っている。振り返ると、扉が閉まるうとして、その先に必死に走りこんでくる兵士が見えた。ああ、お疲れ様です。ご苦労様です。大変ですね、兵士サマって。私の顔は同情心に塗れていたに違いない。本当に彼らには同情しているのだから。兵士の必死の努力も空しく

扉は完全に閉ざされた。魔導書の部屋だ。当然セキュリティはしっかりしているのだから、一介の兵士が開けられることなんてないだろう。ただでさえ今はユウリカ・脳筋・オウジョサマによって破壊された城の修復作業を一刻も早くしないといけないわけだし、当分この扉は開かないだろう。扉が分厚いせいで兵が扉を叩く音すら聞こえない。「しめておいたよ！」と得意げにしているユウリカ・天然呆け・オウジョサマの頭をぞんざいに撫でてやった。気分は王様だ。うむうむ、よくやった。褒めて使わす。

「ふふふん、ど・れ・に・し・よ・う・か・な〜」

本棚の前を歩いて、タイトルを確認していく。なにになに？ 『空を飛ぶ魔法』 4階から飛び降りても平気じゃない！ いいなコレ。

『足の小指を机にしたかのうちつけさせる魔法』ピンポイント過ぎだろ！ ていうか呪いだろソレ！ 『歌がうまくなる魔法』別に私音痴じゃないしな、いらん。『炎を意のままに操る魔法』おおー！ 『魔法っばい！ ファンタジーっばい！』 『凍傷を治す魔法』何で凍傷限定なんだ。他の怪我也治してくれよ。

ララが心の中で突っ込みながら、魔導書を眺めている時、ユウリカ王女は感動に打ち震えていた。初めて、ララ自らユウリカ王女に触れてくれたのだ。しかも、頭をポンポンと！ 暖かくて、幸せな気持ち胸に広がった。撫でてもらった頭を自分の手で触れると、そこからじんわりと手が暖かくなっていくような気がする。自然と顔が緩んで、目は細くなり、口はだらしなく開いた。もっと撫でて欲しい！ その一心でユウリカ王女はララに飛びつく。

「ララ！ ララ！ もっとなでて！」

「オウフツ！」

本棚の前に居たララは当然、したたかに頭を打ち付けた。この王

女はどれだけの脚力を持っているのか、恐ろしい勢いで抱きついたので、ララは激しく頭を打ち付けた。当然のようにララは意識を飛ばす。傾く体。ララにくつついたユウリカ王女も一緒になって倒れた。まだ幼女だからか、響いた音は軽い。そして下になったララがクッションの役割を果たし、ユウリカ王女には全く被害はなかった。白目を剥いて倒れるララを不思議そうに揺り起こす。

「ララ？ ララ？ おきて？」

ユウリカ王女の揺する、はどつやら相当激しいものであるらしい。ゴウンゴウンという穏やかではない空気を出してララは揺れる。あまりの激しさに意識が浮上し始めたララに、一冊の本が襲った。さつき本棚にぶつかった拍子に不安定になった魔導書が、彼女の真上に落ちようとしていたのだった。ユウリカ王女は節穴なのか、魔導書の存在に全く気付かない。分厚い分厚い魔導書は、綺麗にララの額に落下した。

ドスッ！

「きゃー！ ララ！」

悲鳴を上げるユウリカ王女の目の前で、魔導書は優雅にララの上に着地した。表紙が捲れてページがパラパラと靡く。あるページが開かれたところで、本が眩しく光った。ユウリカ王女は思わず目を瞑る。その閃光は一瞬だったようで、恐る恐る目を開くと、ララの上に開かれた本が載っているだけだった。本の中身は真っ白で、何も書かれていない。しかし、今度はユウリカ王女がいくらララを揺すってみても、彼女は目を覚まさなかった。

彼女が目を覚ました時、辺りには木が生い茂っていた。幹は茶色

く、葉は緑。至って一般的な普通の森だ。この世界の森はたまに青だったり黒かったりするから安心できない。そういう場合は大抵、何かあるのだ。

むくりと起き上がって辺りを見渡す。うん、ただの、普通の森だ。問題は公爵家令嬢である自分が何でこんなところで寝ていたのかということだ。なんだ。誘拐か？ でも、人気が全くない。どころか、動物とか、魔物とかが居る気配も何もない。まるきり無音の世界だ。ララは頭を捻る。ここは一体どこなのだろう？

「とりあえず、情報収集してみるか」

立ちあがって辺りの様子を見ようと歩き出した。しかし、不可思議な現象が起こる。森が動いたのだ。確かに一歩進んだはずなのに、その事実をなかつたことにするように、森がぴよんと移動した。なんだこれは。一体どういうことだ！ 試しにもう一歩歩いてみる。森が同じようにぴよんと動く。サツと素早く3歩進んだ。森も同じように素早く3歩分距離を開けた。……この世界に生まれ落ちて5年経つたが、まだまだこの世界を完全に理解するには至っていなかったようだ。仕方ない。だってまだ5年しか経ってないんだもの。うん……うん……。

ひたすら進んでみたり、下がってみたり、ララは色々試してみたが、一番効果があつたのは反復横とびだった。反復横とびをしてみた時、森は混乱したようにぐにやりと曲がった。木々がザアと音を立て、ララが驚いて足を止めると、森がブルブルと揺れて、木々の間から何匹か影が飛び出してきた。影はララの目の前に飛び出してきた、止まった。ララは怪訝な顔になる。何だか不思議な生物だった。兎のように耳が長いもの、狐のように耳が三角のもの、狸のように耳がたれているもの、3匹居たが、どれも輪郭がぼけていてあやふやであり、この世のものではないようだった。そう、幽霊の様な。

「何これ……」

その3匹はララの目の前でふよふよと漂い、ララの反応を窺っている。ララが怪訝な表情を崩さないでいると、輪郭が更にぼやけ、遂には消えた。

「え、何？ 今の何？」

ララの問いに答えてくれる存在はいなかった。森はまたざわざわと動き始める。今度はさつきより大きい影が飛び出してきた。形で判断するなら、犬、豚、トカゲだ。さつきと同様に輪郭があやふやで幽霊のよう。そしてまたララの反応を見て、消えていく。当のララはさつぱりだ。いつまでこの動物幽霊レースは続くのだろうか？

「動物だったら、虎がいいなあ」

思わず口から出た言葉に森が一段とざわついた。勢いよく影が飛び出してくる。目の前に現れた影はやはり、虎だった。輪郭があやふやだが、間違いない。これは虎だ。ララは若干テンションが上がった。ララは前世の頃から犬か猫かと聞かれたら猫派で、ネコ科の動物の中で一番好きな動物が虎だった。豹も捨て難かったが、一番は虎だ。何がそんなにいいのか？ と聞かれても困るのだが、かっこいいと思うし、可愛いと思うし、動物園に行ったら虎の檻の前に居る時間が一番長い。けれど、生態を詳しく知っていると、写真やグッズを集めているとかいうのはない。それぐらいの『好き』だ。ぼやけていた輪郭の虎は、段々と輪郭を鮮明にしていく。そうして現れたのは、ララが一番好きなホワイトタイガーだった。ホワイトタイガーはララに甘えるように顔を近づけてくる。

「お、おおお！」

手をそつと差し出せば、虎はその手に頭を擦りつけた。当然虎に触れたことなんかない。初めて虎に触れたララは、あまりの愛らしさに、顔がにやけている。あの自分が一番可愛いと思っているララがだ！ 恐る恐る手を喉元にやって搔いてやれば、虎はごろごろと喉を鳴らした。

「かわいいー！ ちょうかわいいー！！」

ララはうつかり虎をギュッと抱きしめた。虎は暴れることなく大人しくララの腕に収まる。それどころか喉を鳴らして嬉しそうにしている、そのままララにじゃれついた。忘れないで欲しいのは、ララは5歳児で、虎は至って普通の成獣したサイズだということだ。はたから見れば完璧にララが食われる寸前の光景なのだが、それを指摘する存在はここには誰もいない。一人と一匹は思う存分じゃれつき、遊んだ。虎は毛並みがふわふわで、顔をべろべろと舐めてララを不快にさせることもなかった。肉球はぷにぷにで、触るとちよつと嫌そうにするが拒否されることはなかった。

「うはー、幸せえー」

ここ最近の不幸など吹っ飛んでしまいそうな程、ララは今幸福だった。ずつとこうしてもふもふしていたい いやいやいやちげーよー！

「何やってんだ私！！」

虎から勢いよく離れて、ララは突っ込んだ。虎はきよとんとララを見上げている。いけないいけない、あやうく流されるところだっ

た。自分はこんなに虎に弱かったのか。どうしたの？ まだ遊び足りないよー遊ぼうよーみたいな瞳で見てくる虎を、ララは決死の思いで振り切った。ごめん！ ごめんね！ 私行かなきゃいけないからっ！ どこに？

とりあえず、このままは良くないとララはその場から歩き始めた。虎が起き上がってララの後をついていく。森は今度は動くことはなく、景色は流れて行く。流れて行くのだが、どこまで行っても森だった。歩けど歩けど道はなく、森は途切れない。ここは一体どこなんだ！ 叫びだしたくなるララだった。

### グリコピロレート公爵令嬢と魔導書3

アルバ魔法王国第一位魔法使い、ロジンは目の前に広がる光景に絶句した。彼の周囲に居る宮廷魔法使い達も同様に顔を青くさせ、ある者は嘆くようにその場に崩れ落ちた。彼は己の軽率さを心底後悔した。彼らの目の前にはぐったりと横たわる公爵家令嬢と、その令嬢をぼろぼろと涙を零しながら激しく揺さぶっている幼い王女。傍らには魔導書が転がっている。何が起きたのかは明白だった。ユウリカ王女が嗚咽を洩らしながらロジンを呼ぶ。

「ロジン！　ねえ、ララが、ララがつ、おきないのおっ！　いっばい、い、っばい、よんでも、おき、おきないのっ！」

「王女様、ここにはけて入ってはいけないとあれ程…あれ程言っただけではありませんか」

「ロジン…ねえ、ララ、ララは、どうしてしまったの？　ララは、どう、どうしたら、おきるの？」

魔法使い達の悲愴ぶりに背後の兵士たちは息を飲んだ。まさか、と誰かが洩らす。この状況で、導き出される事実はひとつしかない。この場の責任者、ロジンは苦渋を滲ませながら言った。

「ララ様は、魔導書に魅入られた」

アルバ魔法王国建国史上初の、最年少魔導書挑戦者だった。

「一体どこどこよあ〜」

ララは虎によりかかりながら呻いた。歩けども歩けども森に終わりはなく、また代わり映えもなく、いつまでも緑の葉と茶色い幹の木々に囲まれた森のままだった。ララはあまり地理に明るくはなく、これほど広大な森でも名前が分からなかった。ちなみにララは5歳児ではあるが、一般とはかけ離れた身体能力を持っているので彼女の歩いた軌跡は相当のものである。寄り掛かれた虎はララを労わるように顔を擦りつけた。

「虎あ…どこ一体どこだかわかる？ って喋れるわけないよねー虎だもんねーごめんねー」

首を傾げる虎に、ララは自分で結論付けて謝罪した。わしゃわしゃと頭を撫でると気持ちよさそうに喉を鳴らす。ララは締まりのない笑顔になった。この虎はララのやることなすこと全てに気持ちよさそうに応えてくれるので、ララとしては溜まらない。いいなあ。いいなあ、虎。この子おうちで飼えないかしら？ とまで考えていた。しかしその前にまず、帰らなければならぬ。

「ねえ虎、私おうちに帰りたいの…。どっちに行けばいいかなあ？」

ララは困り果てていた。答えが来るはずのない問いを虎にもしてしまう。そもそもこの森はどこかおかしかった。最初に跳んで移動していたのもそうだが、代わり映えがないのだ。確かに深い森を歩いたら同じような景色が延々と続いていくものだが、『同じような』と『全く同じ』では全然違う。この森は、全く同じだった。全く同じ景色を延々とループしている。真っ直ぐじゃ駄目なのだと悟り、幾度となく方向転換を試みたが、東西南北どちらへ行っただとこ

同じ景色の延々ループに違いはなかった。ララはもつすつかり心が折れている。弱ったララを、虎はつついた。くいと顎を後ろに向ける。

「え？ 何？」

くいくいと、何度も己の後ろを顎で指し示す。

「もしかして、後ろ？ 後ろに進めって？」

勿論、道を後退したこともある。回れ右しても結果は同じだった。またそれをやれというのだろうか？ しかし虎は違うと首を横に振った。そしてまた、顎で後ろを指し示す。ララはピンと来た。顔を輝かせて、いつもよりワントーン高い声で言う。

「もしかして背中！？ 背中に乗っていいの！？」

ララには虎が笑ったように見えた。首を上下に動かして肯定する虎に、ララは興奮してキヤーと叫びつつ虎の背中によじ登った。虎は足を折り曲げて登りやすくしてやった。ララが虎に乗っかり、首の付け根に手をついたのを確認して、虎は立ち上がる。

「おおー！」

一気に視点が高くなり、ララは歓声を上げた。代わり映えのない景色だが、それでも変わって見えて楽しくなる。虎はゆっくりと歩き始め、どんどん速度を速めて行き、終いには走り出した。ララはしがみ付きながら意味のない言葉を叫ぶ。虎がそれに呼応するように跳ねた。

天蓋つきの豪華なベッドの横でユウリカ王女はぼろぼろと涙を零していた。王女の横には王妃が立っており、眉間に皺を寄せながら苦渋の溜息をついている。王妃は己の娘にほとほと手を焼いていた。何の因果か分からないが、王女には規格外の馬鹿力と魔力が備わっており、屈強な歴戦の兵士ですら幼児の王女に敵わない。大きくなれば戦争の際に強力な戦力となってくれること間違いないのでその誕生は喜ばれたが、大きくなるまでが問題だ。王妃と王は自分の娘を戦争の道具とすることに躊躇いはなかったが、幼児の時分で兵士として駆り出すのは流石に寝覚めが悪かった。しかし王女があまりに赤ん坊の頃から様々な騒動を引き起こすので、王妃と王の眉間の皺はいつまでたってもなくなることはない。悪い子ではないのだ。ただ子どもだけなのだと分かっている、しかし、自分たちですら生命の危機に立たされたことが一度や二度ではなく、どうやって無条件には愛せなかった。

「ユウリカ、あなたは一体何度問題を起こしたら気が済むのですか？」

「ごめんなさい、王妃様」

王妃と王は自分たちのことを位名で呼ばせた。戦争の最終兵器として祭り上げようとしている子どもにお母様お父様と呼ばれることは罪悪感があった。

「城の壁は突き破るためにあるものではありません。そんな当たり前のことも貴女にはいちいち教えてあげなければわからないのですか？」

「ごめんなさい、王妃様」

ユウリカ王女には本来付く筈の教育係がない。皆片っ端から命がいくつあっても足りないと言辞めていったからだ。本来王妃の仕事ではなかった、『我が子の教育』に時間を割かれるせいで、王妃は寝る時間が少なくなつた。

「まして人を階段に何度も打ち付けるとはどういうことですか？ それがお友達に対する行為ですか？」

「ごめんなさい、王妃様」

王妃は修繕費の額と、明日の閣議で言われるであろう重臣たちからの苦言を想像して頭が痛くなつた。ただでさえ睡眠時間が少なくいつも頭痛に悩まされているというのに。王女を出産してから王妃も王も薬を多く服用するようになった。そのおかげで王国内の医療が発展したのだけは唯一褒められる点だ。

「出入りを禁止している書庫に連れて行き、なおかつ扉を開けてしまつなど！ あなたは自分が一体何を仕出かしたのか、わかつていますか？ ララを、有望な子ども未来を、不当に奪つたのですよ！」

ユウリカはくしゃりと顔を歪めた。ユウリカは、王妃の言っていることの半分が理解できない。言葉が難しすぎるのだ。それでもいづつもなんとか理解しようとして、返事をするのだけれど、きちんと理解できていないから同じことを繰り返してまた怒られる。今回だつて一体どういう事態が起きているのかユウリカには分からない。ただ、ララが眠つたまま起きなくなつてしまった。そして周りの大人たちが深刻そうに辺りを行ったり来たり、どたばたと駆けずり回っている。ユウリカは不安で不安で仕方がなかった。ララは一体どうなつてしまつたのか。いつ目を覚ますのだろうか。目の前の怖い

王妃は恐ろしい顔をしている。

「ララは、もう目を覚ますことはないでしょう」

「えっ!？」

「魔導書に引きずり込まれたのですよ？ まだ魔法の『ま』の字も知らない幼子だというのに！ 普通の人間はあなたとは違うのです。ユウリカ、あなたは自らの不注意で友達を永遠に失ったのです」

ユウリカは目の前が真っ暗になった。王妃の言った言葉は、親子にも言っただけではない毒を多分に含んでいる。2人の間に、いや、王妃と王とユウリカの3人の間に、親子という意識はかけらもなかった。子どもは意味が分からずとも悪意は伝わるということに王妃は気付いていないのだろうか？ よく反省するように、と最後に言い残して、5歳の幼児を一人残して部屋を出て行った。残されたユウリカは力が抜けたようにぺたんこ座りこむ。ララはもう目を覚ますことはないでしょう。王妃の冷たい言葉が頭の中に繰り返し響く。ユウリカは、先ほどまでとは比べ物にはならない量の涙を目から溢れさせた。

魔導書というものは、何百年も前の魔導師タキソールが今際に遺した全500選からなる書物のことだ。1選につき1つの魔法を覚えることが出来る魔法の書。その魔法を使える素質がある人間だけに魔導書は発動し、本を開いた者の精神を引きずり込む。本は意思を持ち、外部からのどんな圧力にも屈することなく、ただひとつ、使用者に魔法を覚えこませるという点にのみ力を発揮する。よって、本を開き、魔導書に魅入られてしまった者は魔法を覚えるまでは現実に帰って来ることが出来ない。現代の魔法使いは普通、詠唱だけ魔法陣であり程度その魔法が使えるようになってからその魔導書に臨む。そして詠唱も魔法陣も必要ない、意思だけで魔法の行使が可能になる一段上の魔法使いとなるのだ。ララはその前段階を何

もせず、魔法の知識すらも聞きかじり程度の知識で魔導書に精神を引きずり込まれた。精神を引きずり込まれている間も時間は現実と同じように流れている。ララが魔法を覚えて還ってくるのはいつか、絶望的な状態だ。

(しかもよりによつて、『使い魔を作る魔法』だなんて)

王妃は部屋の外で何度目かしのれない溜息をついた。ララが開いてしまった魔導書は、全500選の中でも上位魔法に位置する、特に難しい魔法のひとつだった。歴史上に見てもその魔法を使える者は10人にも満たない。そんな高度な魔導書を開けるとは、ララは本当に将来有望な子どもだったのだろうか。しかし、幼い身空で魔導書の与える試練に立ち向かえるとは思えない。魔導書に精神を引きずり込まれたまま還って来られなかった人間も多々いる。彼女はララの両親であるグリコピロレート公爵の嘆きを思い、顔を歪めた。

## グリコピロレート公爵令嬢と魔導書4

さて、ご存知のように、現実ではお葬式ムードが漂っちゃっているが、魔導書の中のララは至って平和である。大好きな虎の背に乗り疾走している。大変ご機嫌だ。言っちゃあなんだが、現実よりよっぽど平和だ。ララの顔はもうご機嫌に緩みきっている。虎に乗っても景色は相変わらず無限ループだったが、今のララはそんなことはまるで気にしていなかった。全身に当たる風はとても爽やかで、気持ちがいい。虎が跳ねるのに合わせて視線が上下するのが面白い。ララは今、本当の5歳児のように無邪気に笑っていた。いつもの腹に何かを企んだ笑みではなく、演技からの無邪気な笑顔ではなく、本当に心からの笑顔で楽しんでた。

「オーロレイッヒー！」

「ガウツガウツ！」

ララが叫べば、それに呼応するように虎が吠える。普通の子どもだったならば恐ろしいと震え上がるその雄叫びも、ララには楽しそうな叫び声にしか聞こえない。一人と一匹の心はまるで繋がっているかのごとく、お互いの感情が理解できた。そして相手が楽しければ自分も楽しいと、お互いに引きずられるように感情が伝染していく。主にララから虎へと一方通行の路線だったが。

「ア〜アア〜！」

「ガ〜ウガ〜！」

ララは帰れないという事実を故意に忘れ、浮かれていた。人はそれを現実逃避という。

夕焼けによって染められた赤い光が窓から降り注ぎ、灯りの灯らない部屋を柔らかい光で包み込んだ。窓枠の形に切り取られた淡い光を頬に受けて、ユウリカ王女は立ち上がる。天蓋つきの豪華なベツドによじ登り、横たわるララの隣に腰を落ち着けた。布団の中からララの手を取りだし、己の手で包み込むように抱いた。ボキボキツ、と、嫌な音が部屋に響く。そんな音は聞こえていないとでもいうように、ユウリカは一心に手を握りしめた。ああ、もう、その、残念ながら……どう見ても複雑骨折です。

「おねがいです。ララをかえしてください」

何人か前の世話係が教えてくれた、おまじないの儀式。手を組んで、組んだ手を額に押し当てて、祈る。それがお祈りの儀式なのだと。良い子にしていれば願いは聞き遂げられるのだと教えてもらった。その世話係ももういないけれど。良い子でいたかったけれど、たくさんたくさん色んな人に怒られてばかりで、ちつとも良い子にはなれなかったけれど。

「おねがいです。これから、いっぱい、いっぱい、がんばりますから。いいこになりますから。ララをかえしてください。おねがいです」

涙でカピカピになった頬を引きつらせながら心の奥底から、引き絞るように声を紡いでいた。

魔法でどうにかなる問題というのは、本来ならば、具体的に物事を思い浮かべなければならぬ。より正確に、より緻密に、何がど

うしてどうなったのかを思い浮かべ、そこに己の魔力がどう反応したのか具体的に思い浮かべ、本当にその通りになると信じる事ができなければ魔法は成功しないし、十分な威力が出ない。しかし、ユウリカ王女は特殊だった。ちつとも原理や仕組みを詳細に思い浮かべることなんてしていないのに、その通りになると”信じこむ”だけで魔法が成立してしまう程に魔力の質が良く、また膨大な魔力量を持っていた。そんなユウリカの魔法が、たかが何百年か前の稀代の魔導師が作った魔導書に負けることがあるだろうか？ 魔導師タキソールは確かに偉大だった。稀代の魔導師だった。しかし、もう過去の人なのである。今をときめく最恐魔法使い、ユウリカが相手の骨を粉碎するまで力を込めて、心の底から祈ったのである。敵わないわけがないじゃあないか！

ララのユウリカからの逃避行は1日も経たないうちに終わりが訪れた。他でもない、逃げ続けた王女自らの手によって。

「え、な、何？」

虎がいきなり急ブレーキをかけたと思ったら、視界が不自然に揺れた。まるでカーテンが波打つかのごとく景色が波打つ。瀬戸内際の波のように、地面が波打つ。虎が天を見上げて唸った。なんだ、上から何かやってくるのか？ ララは虎の背中にしつかりとしがみついた。上からごうごうと風が吹き荒れ、木々がなぎ倒される。細い木は地面から引っこ抜かれ、宙を舞った。虎も爪を立てさせて地面に必死にしがみついているが、ララの方が先に限界を迎えた。小さい手では踏んばりが効かず、小さい体が空に投げ出される。虎は自分の背からララが離れたのを感じすると直ぐ様飛び上がり、ララの首根っこをくわえた。そのまま下に着地しようとしたところで、一際激しい風が吹く。一人と一匹はそのまま上空へ投げ飛ばされ、上

へ上へと吹き荒れる上昇気流に乗ってしまったかのように上へ上へと飛ばされていく。あまりの風の強さに目も口も開けられないまま風が止むのを待った。

気付いた時、ひどくお腹が空いていることに気付いた。そう言えば虎と戯れることに夢中で昼食も夕食も取っていない。二番目に気付いたことはやたら左手が熱いということだった。じんじんと全体的に熱を持っていて、動かそうとしたらもう駄目だった。ひどい激痛が走り、余りの痛さに思わず目を開けた。すると自分の左手をまるで親の敵とでもいうように握りしめてくれちゃっているユウリカ王女が目に入った。彼女の手握りしめられた自分の手は本来折れてはいけない方向に折れ曲がり、紫色に変色していた。思わず金切り声をあげて後悔する。金切り声をあげた瞬間、王女はビクツと震え、自分の手により一層負荷がかかった。悲鳴もあげられない程痛くて、生理的な涙がぼろりと頬に流れ落ちる。

(なんなの、なんなの!? 一体何が起こったの!? 何で私は王女に紫色なんて不吉にも程があるくらいに左手を握りしめられなくちゃいけないの!? 意味がわからない! 意味がわからない! 紫色ってなんだよ! 何であらぬ方向に指が折れ曲がってるんだよ!? 何で私がこんな目に遇わなくちゃいけないんだよ! 私の虎はどこだよ!?!?)

ララは自分の可哀想な左手を見ることに夢中で気付かなかったが、ユウリカ王女は大きい瞳を更に大きくさせてララを凝視していた。それ以上大きく目を開けたら目ん玉が飛び出しちゃいますよ、というくらいに。

「ララッ！」  
「ゴフッ！」

ユウリカ王女はララの左手をパツと離し、ララ自体に飛びついた。ぎゅうぎゅうといつものように抱きしめるが、その力はいつもと比べると段違いに弱々しい。ララはいきなり手離され、落ちた衝撃で酷く痛む左手のことを考える片隅でユウリカ王女の奇行に首を傾げた。何だ？ 何でこんなに弱々しいんだ？

「よかった……ララ……ほんとうによかったっ……！」  
「あん？」

ユウリカ王女の声は聞いたことがないくらい弱々しく、泣いていたかのように震えていた。何だこいつ。いいからどけよ、とララが思っている時、横から衝撃が訪れララの上からユウリカがあつという間に消え去った。突然の出来事にララが目を白黒させていると、のっそりとベッドの右側から虎が姿を見せる。さっきまで一緒に魔の森にいた、あの虎である。ララはユウリカに抱き締められていた時とはうってかわって目を輝かせた。

「虎!!！」  
「ガウッ！」

虎の後ろにはユウリカが転がっている。どうやら虎がヤツを退かせてくれたようだ。褒めて褒めてと言わんばかりに尻尾をこれでもかと振っている虎が可愛くて可愛くて仕方がなく、右手を動かそうとして悶絶した。左手が痛んだのだ。左手は動かそうとしていないにも関わらずこの痛さ！ 一体何をしてくれやがったんだこのスツトコドッコイはと王女に視線を向ければ、彼女は眠っていた。頬はかなりの量の涙を流したことが分かるくらいカピカピで、髪はボサ

ボサ。ひどい不細工がそこにいた。でも顔は本当に幸せそうであら  
かだった。左手を刺激しないように慎重に虎に抱きつきながら、ま  
さかこのガキ死んだんじゃないかな？ とちよっと……いや、か  
なりすごく大変嬉しいんだけどちよっぴり困る想像をしてみる。死  
因何よ？ わ、私じゃあないわよ私じゃあ。

すると部屋の外から随分慌ただしい物音が聞こえてきてララの体  
が跳ねた。背中に冷や汗が吹き出る。いやいやいや、違ってたか  
ら私じゃないんだって。ね？

「ララ！！？」

「ララちゃん！！！」

「ちよっ、あの、違うの私じゃない！ 私じゃないよ！！」

内開きのドアを盛大に開けて雪崩れ込んだのは両親と兄二人  
だった。息を切らせ、いつもきつちり決まっている服は崩れてしま  
っている。あの、だから、ほんとに違うの。殺ったの私じゃないん  
だって！ 多分！！

皆は虎と戯れている私に一瞬ぎよつとし、すぐにホツとしたよう  
な顔になってお母様に至ってはぼろぼろと涙をこぼし始めた。え、  
待って？ 状況説明して誰か。プリーズ？

「意識が戻って本当に良かった……！ ああ、ララっ……！！」

「ぎえっ！？」

「ど、どうしたんだララ！ どこか怪我しているのか！？」

「いや、ていうかあの虎はなんだ！ 怖いぞ！」

「お、お父様！ ラ、ララの左手！ 紫色に変色してる！」

「キヤアアアア！」

あ、お母様が倒れた。

「ロジン！ ロジンを呼んでこい！！」

「はっ、ただいま！」

「うわー！？ 虎の影に誰か倒れてる！」

「ユ、ユウリカ王女様じゃないか！！」

「お、お息してる……か？」

「ウワー！ 王女！？ ウワー！！」

「良かったなあユウリカ、帰ってこれで。良かったなあ」

「ガウツ！」

「ウワー！ 虎が喋ったー！」

「い、医者ー！ あと猛獣使い連れてこーい！！」

カオスだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9931v/>

---

グリコピロレート公爵令嬢の受難

2011年10月3日10時00分発行